特251
22

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

仰信の會道

石介村松

東方書院

始

特251
22

道會の信仰

松村介石

著者近影

目次

予聖の經歷……一
(一)漢學を修む……一
(二)耶蘇教徒となる……二
(三)信仰に動搖を來す……三
道會の起源……五
道會の主張と規約……一〇
道會の儀式……一四
(一)音樂と讃美歌……一五
(二)禮拜……一五
(三)說教……一六
(四)誓言と道會頌……一八
(五)經典……二六
頌歌……三〇
道會目下の情況……三〇
(一)生ける宗教……三一
(二)修德……三三
(三)愛隣……三四
(四)永生……三五
結尾……三五

道會本部拜天堂外觀

同上内部（正面は神殿・壇上は著者）

道會の信仰

松村介石

予輩の經歷

(一)漢學を修む

道會の信仰を述ぶる前に、一寸、予輩の經歷を言はねばならぬ。左もなければ『道會の信仰』の由つて來たる所が解らなくなるからである。

予輩は、七八歳の時分より、十六歳迄、漢學をやり、東京へ出て、安井息軒や、京都へ行つて、市村水香の塾に入つて居た事もあつたが、十七歳より洋學に轉じ、十八歳、更に東京に出て來て、二三の英學塾に入り、其歳の暮に、在横濱宣教師のバラ學校に入り、間もなく、耶蘇教徒となつたものである。

(二) 耶蘇教徒となる

勿論、予輩は耶蘇教が大嫌ひであつた。否、當時の我國民として恐らくは一人として、耶蘇教の好きな者はなかつたであらう。然し正則をやるには、是非とも西洋人に就かねばならず、其の上、月謝が只の樣なものであると聞いたので、出掛けて行つた。其代り毎晩、義務的に此のバラより、バイブルの講義を聽かされ、最初の中は、馬鹿々々しくて聽かれなかつたが、段々と聽いて見ると、此の耶蘇教と云ふものは、矢張り、皇天上帝を拜むのであると云ふのであるから、それならば、敢て怪しいものではあるまい、儒教でも、堯舜禹湯文武周公迄は、此の上帝に祈つたものであるからと、少々興味を持ち始めた。處で何せ予輩が、此の耶蘇教の教ふる神を、皇天上帝であると知つたかと云ふに、當時支那譯のバイブルや、ツラクトが澤山出來て居たので、其れを讀むと、彼の『ゴッド』を皆皇天上帝と譯してあつたからである。

又次に、その說く所が、神に對し、人に對し、世に對して、本當の人間になれよと云ふのであつた。卽ち、人々各自に向つて其德を修めよと云ふのであつた。

又次には、愛隣の敎へであつた。サマリタンの譬を始め、耶蘇は何の爲めに、此の世に來たかと云ふに、病者が憐み、無實の罪の爲めに牢屋に入つて居る者を見舞ひ、貧民を救ひ、無告の民に同情せ

ねばならぬと說くのであつた。予輩は苦學生で、隨分苦勞して來た。然るに、此の予輩等の生涯に同情すると云ふのであるから、愈々好きになつて來た。

又次には、靈魂の不死を說くのであつた。人間は此世ばかりで消滅するものではない、死んで其儘土となつたり、煙となつて、それで全く終局と云ふのではなく、更に靈界と云ふものがある、永遠の生命と云ふものがある、乃で初めて、人生は尊いものとなるのであると敎ふるのであつた。予輩は前言ふ如く苦學した者だから、時々無常觀に襲はれて、『何だい、馬鹿々々しい、こんなに苦學して居ても、友達の中に、ぽこーんと、脚氣衝心で、死んで仕舞つたものもある。又肺病に罹つて、二三年も煩うて死んだものもある。されば、予輩とても、いつ何時脚氣衝心に逢ふかも知れない、又肺病患者になるかもわからぬ。左れば、今迄の苦勞は水の泡だ、人生程馬鹿々々しいものはない』と、屢屢思ふことがあつた。乃で、愈々此の耶蘇敎に歸依する事となり、遂に、洗禮を受けて、十八歳の冬クリスチャンとなつたのであつた。

(三) 信仰に動搖を來す

斯くて愈々クリスチャンになつて見ると、其の信仰が段々と高まつて來て、今度は大熱心となつて仕舞つた。そこで予輩は元來、大學者か、大政治家にならんと志して居たのであるが、最早や、そ

んな、私のアンビションは皆、捨てゝ仕舞つた。なにしろ、神の恩惠で、この世に生きて居るのであるから、此の神の命に從はねばならぬ。そして神の命は、今日、此世の人に悔改めを命じ、之を神の前に導き來り、之を天國に救ひ上げようと云ふのであるから、予輩は其れより一所懸命になつて、其後十數年の間、この耶蘇の傳道界に活躍した。

乃ち十八歳の冬よりクリスチャンになつて、二十七八歳迄、其傳道界に活躍したが、此處に端なくも我が信仰に一大頓挫を來した。それは、怎んな理由であるかと云ふのに、右云ふ樣に、神とか、修德とか、愛隣とか、永生とかの信仰には、些少の動搖も來さなかつたが、其他の敎理に就いては、非常な疑問を起し始めた爲めであつた。

最初は宣敎師の云ふ事や、又耶蘇敎の辯護の書物ばかり讀んでゐたが、その辯護の書物の中に、ミルや、スペンセルや、ベンタムや、ドレーパルなどを駁した議論が數々出て居る。乃でその反對の本が讀み度くなつた。故に其本はないかと宣敎師に尋ねて見ると『いや、あんな本を讀んではならない、之を讀むと、却つて迷ふ樣な事になるから止めろ』と云ふのみならず、更に宣敎師等のライブラリーを覗いて見るに、殆ど、其んな書物は一つもない。乃で、これでは不可んぞ、辯駁の本許り讀んで、其の元本を讀まない樣では駄目だ、又それを讀まさない宣敎師は卑怯者だと斷じ、其後横濱より東京へ出て來て、そんな本を搜して買うて歸つて、之を讀んで見ると、仲々面白い、尤な事を云うて居る、そこで宣敎師の言ふ如く、到頭迷ひ始めたのであつた。又其中に獨逸から來る高等批評等の英譯を讀んだり、殊にブライデレル等の歴史に根據を置く所のバイブルの批評等を讀んで見ると、如何にも其れに相違ないと思ふやうになり、神を拜する事や、道德を守る事や、仁愛を行ふ事や、靈魂不滅を信ずる事等には、少しの變りもないが、耶蘇や、バイブルや、十字架や、アダム、エバの物語りに就いては、全く以前の信仰を捨てる事になつて仕舞つた。卽ち聖靈が處女マリヤに宿つて生れたのが耶蘇だと云ふが、此れは後からの作り事である。又、十字架の敎へ、卽ち贖罪等は決して耶蘇の說いたものではなく、これは後から出て來た、ポーロの神學であると斷ずる樣になり、更にバイブルとても、前に信じて居た樣な、不謬不誤の神の言でなく、矛盾もあり、修飾もあり、虛僞もあり、彼のバイブル中、第一の書と思つて居たヨハネ傳の如きも、耶蘇の死後二百年も後に出來たもので、之れにギリシャの哲學などが、入つてゐる樣な事もわかり、其上、原罪說の由つて起り來る、アダム、エバの物語は、全く小說であると解つて仕舞うたので、それは〳〵がつかりして仕舞つた。そこで、一時耶蘇敎の傳道を中止するに至つた。

道會の起源

右の如く耶蘇敎の傳道は中止したが、それでも默つて遊んで居ることが出來ないので、今度は社會

教育なる名稱を作つて、國民全體に精神的教育を施さんと試みた、そして其間、專ら、精神的著書に從事した。立志の礎や、リンコルン傳や、修養錄や、社會改良家列傳等は皆、其時代の產物である。然し考へ來ると、一體予輩は、何の爲めに生れて來たのか、神が何を予輩に命じ給ふのか、曾ては耶蘇敎を此世に傳へるのが其れであると思うて居たのだが、それも右云ふ如く、出來なくなつて仕舞つたとなると、今後何が余に降る天の使命か、今は社會敎育等と稱へて、其講演をやつたり、精神的著書をやつて居るが、然し此れが、予が一生の事業であるか怎うか。神の命は各方面にある。神は宗敎界ばかりの神ではない、道德界ばかりの神ではない、精神界ばかりの神ではない。亦た更に政治界の神でもあり、實業界の神でもあり、敎育界の神でもあり、凡そ人事百般の神である。左れば、神が予に命じ給ふ事柄は、今や何界に在るかと考へ來ると、薩張り見當が付かなくなつたので、よし、それなら一つ、鎌倉に引込んで、萬國の歷史を繙き、其間に出沒する聖賢、並に英雄豪傑の傳記を調べ、予が天より受くる使命は、之だと決めなければならぬと考へ、そこで萬事を擲つて、遂に鎌倉に引込んだが、此の鎌倉に引込んだのが、丁度四十二三歲で、それより鎌倉に居ること殆ど六ヶ年、そして其間に萬國史五卷を著はしたが、之を著はし了る時が、丁度日露戰爭の終末と同時であつた。

そこで、つら〳〵考ふるに、今後、日本は怎うなるか、日淸戰爭、日露戰爭の兩役に於て、愈々世界に進出したのだが、サア此れからが大變だ、今迄西洋人が我が日本國を彼等の遊びに來る公園と心

得、又我日本人を己れの愛玩物の如く考へて居た。然し、もう彼等は其の夢より醒めて來るぞ、『怎うして、此日本人は決して、彼等の愛玩物となつて滿足するものではない。今日迄は歐米崇拜の奴となつて居たから、我が命のまゝに、チン〳〵もやつた、わん〳〵もやつた、お廻りもやつた、然し此れより獨立獨步の旗を翻へして、我等に向つて來るぞ』と判斷し、今度は彼等が寄つてたかつて、我日本を押さへようとするに相違ない。左れば其時に當つて我國に必要なものは大政治家である。予輩は耶蘇敎を信じてより、宿昔靑雲の志であつた政治家たるを止めて仕舞つた。然しもう耶蘇敎が傳へられなくなつたからは仕方がない。又宿志を喚び起して政治界に乘り出さう、然り〳〵、今我國の政治家は、此の世界の前途を知らない、或者は今尙ほ西洋崇拜に醉うてゐるし、或者は頑迷固陋で、日本ばかりに威張つて居て世界を知らない。其上兩者とも天下國家を治むるの道を辨へてゐない。宗敎を無視し、道德を蔑如し、人格を外にし、唯々制度や、組織や、法律や、規約ばかりでやつて行かうとして居る。そんな事で國家が治まる筈がない。否、遂に土崩瓦解するに決まつてゐる。古より『天下を平かにせんと欲する者は、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊へふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を修む。其の身を治めんと欲する者は、先づ其の心を正しうす。其の心を正しうせんと欲する者は、先づ其の意を誠にす』とある。然るに今日、我政治家中に、此處に着眼して居るものは果して誰ぞ。實業、敎育、宗敎、何もかも必要である。然し此等を

統轄し、制御して行くものは、政治家である。されば此際一ッ政治家にならう、否、政治界に入つて此の政治家を指導するものとならうと決心した。此れが丁度、日露戰爭直後、卽ち予輩が四十八九歳の時であつた。

然るに此の際、不意の出來事が起つた。それは、予輩も、予輩の家内も諸共に肺病に罹つたと云ふ實狀である。當時、高田畊安先生が、やつと茅ケ崎に、南湖院を建てた初めなので、兼ねての友人であるから、行つて診察して貰ふと、怎うも怪しいと云ふわけ、そこで歸へつて來て、しよげて仕舞つた。何だ、何を計畫しても、考へても、それは健康體である上の事だ、然るに、此んな不治の病に罹つたら、何にもならぬ、そこで耶蘇敎の色々の信仰に於ては、全く變つてゐたが、神を信ずる丈はまだ確かで、當時猶ほ引續いて、朝夕神に感謝祈禱してゐたから、怎か、此の病氣を癒して下さいと祈つて居ると、はしなくも玆に青年時代の事を憶ひ出した。予輩は、青年時代に神經衰弱にかゝり、其時神に祈り、『如何か此の病氣を直して下さい、斯んなに、ぶら〳〵して人の厄介になる位なら、一層天國に召して下さい、然し此を直して下されば、一生涯私的志願を廢めて、名利を省みず、只管、傳道に從事します』と誓つた。それを今更思ひ出して、何だか濟まないやうな氣がして祈つて居ると、天外忽ち聲ある樣に覺えて、汝が政治に志すのは、矢張り汝のアンビションより出て居る。故に之より更に其の私的志願を擲ち、今日は耶蘇敎でなくとも何でも可い、只だ〳〵汝の體驗する所の宗

敎、汝の抱く所の宗敎を說き、之を天下に弘めよ、それが汝の使命であるぞ』と心に響いたので、其より忽ち平伏して、愈々今日、予の持つて居る宗敎を天下に弘むべく決めたのであつた。

右の如くにして、もう愈々宗敎界に乘り出すと決まつた。左れば今日吾が抱いてゐるところの宗敎とは何ぞ、吾が體得せる宗敎とは何ぞと詮じ來ると、つまる所、其れは、

第一、神を信ずる事、第二、德を修むる事、第三、隣を愛する事、第四、永生を信ずる事と云ふ此の四綱領の外にはない。然し、たつた此の四綱領であるが、何に之れで充分だ、否、天地主宰の神を信ぜよと云ふ丈でも、一つの宗敎團體となることが出來る。結局耶蘇敎が怎うの、阿彌陀が怎うのと云ふから、陽明の謂ゆる遮迷に苦しむのだ、然り此の四綱領で充分である、一つ之れを以て我日本國民を宗敎界に導かう。否、日本のみならず、今や世界は宗敎革命時代に屬してゐる。故に先づ、此の簡單明瞭なる不磨の眞理、不朽の道を我が此の日本より、世界に傳ふべしと決心し、此處に宗敎團體を起すことになつたのである。

斯くていよ〳〵宗敎界に乘り出すべく決心した。然し如何にして其の運動に着手すべきか、身に一文の蓄もない、左ればと云うて、富豪に訴へる心もなく、權門に賴む心もない、ソコで如何しようかと考へつゝ祈つて居ると、『兎に角、出來る丈やれ、餓ゑて死ぬる心算でやれ』と云ふ樣な神の聲を聞いたので、早速、東京へ出て來て、當時、九段坂敎會の牧師であつた山鹿旗之進君に賴み、其敎會

で『餓死論』と云ふ題で說敎し、同時にいよ〳〵更に宗敎界に乘り出すと誓言し、それより東京の大森に來て、兼ねて予の著書の出版者であつた福永君に賴んで、一家を造つて貰ひ、先づ著書や、論語の切賣り等で露命をつなぎ、やつと其日々々を過しながら、兎に角、日本より始めるのであるから、日本敎會なる名稱を付して、一宗敎團體を起したが、其の中、渡邊國武先生等の援助を得て、丸の內の商工中學校で講演會を開き、更に田村新吉君等の援助で、和强樂堂に移轉し、其處で講演を續け、問もなく日本敎會を改めて道會となし、そして今日に及んで居るのである。

道會の主張と規約

扨、愈々道會が出來た。そこで主義主張として、左の宣言を發した。

道會の主張

我道會は不朽の道、不磨の眞理、卽ち古今に亙り、萬國に通じて、動かず變せざる宗敎道德の根本義に據り、人をして天に對し、世に對し、永遠に對して、自己一身の安立と、其の本分とを完うせしめんことを期するものなり。而して其會員たるものゝ心得左の如し。

四綱領

道會員は左の四綱領を奉ずべき者とす。

一、信神　一、修德　一、愛隣　一、永生

信神とは、宇宙の神を信ずるを謂ふ。修德とは自己一身の修養を謂ふ。愛隣とは、人と國家の爲に盡すを謂ふ。永生とは人格の不死を謂ふ。

本會と會員

本會は、右の四綱領を奉じ、之を行爲に施すものゝ團體なり。會員は神を父となし、人類を同胞となし、相互を兄弟姉妹となすの覺悟あるべきものとす。

儀式

入會式、婚儀、葬儀、禮拜式等、凡そ一切の儀式は、國と時代の便宜によりて之を定む。

事業

傳道の外、愛隣の主張を有するものなれば、社會事業にも、國家事業にも、一個人若しくは團體として、挺身努力することを怠るべからず。

經典

天啓を受けたる神人の敎に據りて編纂するものとす。

事天の一途

右は道會主張の綱目なれども、其の神髓に至りては誠意正心以て天に事ふるの一途あるのみ。

事天の一途

道會は何を說き何を敎ふるか。曰く事天の一途則ち是れのみ。天とは何ぞ。曰く、天とは專ら之を謂はゞ則ち道なり。形體を以て之を謂はゞ則ち天なり、主宰を以て之を謂はゞ則ち帝なり。妙用を以て之を謂はゞ則ち神なり。情性を以て之を謂はゞ則ち乾なり。

然らば則ち如何にして斯の天を知るを得べき乎。曰く心を盡す時は則ち性を知る、性を知るときは則ち命を知る、命を知るときは則ち天を知るなり。

心は汝の衷に在り、何んぞ他に求めん。聞見を擲ち、丹青を洗ひ、素紈に向ひ、良知に質さば、我は卽ち何物ぞ。朝暾の山櫻に匂ふが如く、皎月の天に懸るが如く、炳乎たり、灼乎たり、一誠事に當りて動き、四端物に應じて發す。

斯の實、斯の相、果して是れ何物ぞ。我れ已に我が物にあらず、斯の心何處より來る。斯の果此處にあり、斯の因何處に在る。命ずるが如く、令するが如く、責むるが如く、褒むるが如し。命ぜらるるものは吾なるも、命ずるものは誰ぞ、令せらるゝものは吾なるも、令するものは誰ぞ、責めらるゝものは吾なるも、責むるものは誰ぞ、褒めらるゝものは吾れなるも、褒むるものは誰ぞ、吾れ於此乎天を知るなり。

汝道を何處にか尋ぬ、道は汝の衷に在り。汝天を何處にか求む、天は近く汝と言へり。汝帝を何處にか拜す、帝は儼然高く汝の頭上に在り。神を人工の神殿にのみ訪ふ勿れ、神は日月と俱に輝き、櫻花と俱に開き、禽蝶と俱に飛ぶ。誰か謂ふ、天地無情、本石心なしと、大巖の橫はるところ草樹之れに生じ、草樹の生ずるところ雨露之を濡す、天は動き、地は廻り、四時行はれ、百物成る。

斯天、斯帝、斯神、斯乾、果して吾人に何事をか求む。曰く、心を盡し、意を盡し、智を盡し、力を盡して、主たる此帝、父たる此神に事へんことを求む。然則之れに事ふるの道如何。曰く、吾人は先づ我が德を修めざるべからず。我が明德を明かにし、天の誠を誠にし、靈臺の塵を拭ひ、月前の雲を拂ひ、仁に志し、義に勇み、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざる底の人格を養ふこと卽ち是れなり。次には隣を愛せざるべからず、隣とは人と國家と世界とを云ふなり。吾人は崇高なる人格を養ふと同時に、此の人と國家と世界とを愛せざるべからず。見よ、無告の民は周圍に滿ち、國家の危急は眼前に迫る。然而して、今や世界は修羅の街衢と化し、悲風吹き慘雨舞ひ、方に眼も當てられざる狀態にあり。然則吾人此隣を愛するもの、實に一日も袖手傍觀すべきにあらず。必ずや殺身底の活躍に出でざるべからず。然而して第三には、我が天に事ふるの道は、啻に此の一時的の夢現世界に止まらず、將に永遠のものたることを自覺するに在り。天は吾人を此世に生じ、吾人をして先づ修德愛隣の人たらしめ、以て此世に於て其天命を行はしめ給ふのみならず、更に之を天上に呼び、吾人をして永遠無窮に其の天命を行はしめ給はんとするなり。墳墓は吾人

の終局にあらず。是れ吾人が天に享くるところの特權にして、而して吾人が萬物に長たるゆゑんのもの、亦た實に玆に存す。

然則ち、天が吾人に求め給ふところのものたる知るべきなり。冀くは皇天上帝、我が闇を照し、我が蒙を開き、我が鈍に鞭ち、我が愚を憐れみ、我をして德に進ましめ給へ、我をして世道人心の爲めに盡さしめ給へ、然而して我れ若し天意に背くことあらば、たとひ如何なる懲戒を我れに下し給ふとも、我は甘じて之を受けん。夫れ我は已に死を決して起つ、冀くは我をして我が死處を知らしめ給へ、凡そ君の祿を食むものは君の爲めに死す、我れは萬物を天に受く、我れ豈天の爲めに死せずして可ならんや。我は惟だ天に事ふるの一途あるを知るのみ。吁諸聖其化を異にすと雖も、其指すところは卽ち是れのみ。見よ、浮雲去て皎月新たなり。牛を棄てゝ之を拜せよ。

道會の儀式

(一)音樂と讃美歌

前述の如く、予輩は耶蘇教より來たのだから、一切の儀式を耶蘇教的にやつて來て居た。然し其れが追々と變遷したが、其の變遷は斯うである。

最初は、オルガンにつれて、耶蘇教の讃美歌を歌うて居た。然し其の讃美歌の中、三位一體とか、救主とか、十字架とか、贖罪とか云ふやうな、最早や信じなくなつて居る文句が多いので、一時之を廢め、規約の中にもある通り、國と時代に依りて之を定むるのだから、一ッ神道式にやらんと思ひ、笙篳篥を吹いて見たりしたが、怎もやりつけぬので、滑稽じみて、可笑しいので、又之を廢め、今日では矢張りオルガンに合せ、今度は道會自作の讃美歌を歌ふことにしてゐる。

(二)禮拜

之れも、國と時代に從ふとあるが如く、支那へ行つては支那、歐羅巴へ行つては歐羅巴と、各々其國の宗教や風俗に適ふものを採用したい心算であるから、先づ日本の宗教と云へば、神道であるし、而して其の神道の儀式が、尤も我が風俗に適して居ると思ふので、之を用ふることゝなし、第一に神殿を造つた。此の神殿は神道的で、其中に御幣と鏡を安置し、前に御簾を垂れ、其前に祈禱文を捧げて禮拜する事とした。

(三)說教

前述の如く、我が道會は四綱領を奉ずるものなるが故に、一切は、此の四綱領より出て來るので

ある。

信神を說く時には、全く純宗教的のものにして、知識、靈感の上より、我が體驗を說くのである。

修德を說く時には、道會獨特のバイブルも出來て居るし、其の四書も出來て居るし、其の老莊も出來て居るし、其の語錄も出來て居るから、其れを教科書として說くのである。

愛隣を說く時には、政治を論じ、教育を論じ、實業を論じ、遂に天下國家に及び、畢竟するところ現在社會の腐敗墮落を擧げ來り、世の罪惡に向つて鬪ふのである。

永生を說く時には、全く此の世を離れて、永遠無窮の希望を說き、此の世より去つて靈界に行き、更に神の御用を務むべき事を說くのである。

結局、此の四綱領を一緒に說くこともあるし、又別々に說くこともあるし、つまるところ、神の使命を此の世に傳へ、此世を天國と爲さんとすると云ふ念願を以て奮躍邁進するのである。

(四)誓言と道會頌

說教終りて、歌を歌ひ、その歌の終るや、一同起立して、神前にあつて、左の誓言を會衆諸共に合誦するのである、而して此の誓言を終るや、我が特製の道會頌を歌ひ、說教者の祝禱を以て全集會を了るのである。

祈禱文

嗚呼大なる哉、皇天上帝。其の德疆りなく、其の威極りなし。盛なる哉、造化の迹。物に體して遺すことなし。至れる哉、天父の愛。我等をして恒に其の恩寵に浴せしめ給ふ。

我等は其の德を頌へ、其の迹を拜し、其の惠を謝し、爰に謹みて禱り奉る。

仰ぎ冀くは我等をして、恒に其の德に化せしめ給へ。仰ぎ冀くは我等をして、恒に其の化育を享けしめ給へ。仰ぎ冀くは我等をして恒に其の慈懷に在らしめ給へ。仰ぎ冀くは我等の罪過を赦し、我等の心胸を清め、我等の行爲を匡し、我等に神靈を降し、我等の闇蒙を闢き、我等に光明を與へ、我等の一生を導き、以て我等をして永に上帝の忠僕、天父の愛子たらしめ給はんことを。誠恐誠惶謹みて白す。

誓言

我等は信神、修德、愛隣、永生の四綱領を奉ず。

我等は神を信じて以て、恒に神に事へん事を誓ふ。

我等は德を修めて以て、恒に我人格を高めん事を誓ふ。

我等は隣を愛して以て、恒に人の爲め、國の爲め、宇內人類の爲めに盡さん事を誓ふ。

我等は永生を信じて以て、恒に希望に活きん事を誓ふ。

仰ぎ冀くは皇天上帝。我等をして恒に天の靈化に浴せしめ給へ、我等をして恒に天の光明に接せしめ給へ、我等をして恒に天の指導に與らしめ給へ。

仰ぎ冀くは我等をして、恒に此の誓言の實行者たらしめ給はん事を、誠恐誠惶、謹みて白す。

道會頌

もろ人悅べ、時來りぬ。
迷はず進めよ、道ひとつぞ、道ひとつぞ。

右は禮拜說教後に歌ふものなり。

(五)經典

前の規約の中に天啓を受けたる神人の敎へに據りて編纂するものとするとあるが、已に道會を起してより、二十有餘年も經つてゐるので、今日では、此の經典が大分出來て居る。先づ道會で作つたものの中には、左の如きものがある。

四綱領の歌

信神の歌

浩々たるは宇宙なり、漠々たるは世界なり、これをば一つの理法もて、治し給ふは御神なり。

怒りたまへば天柱は、震ひわななき海をどり、笑ひたまへばそよそよと、花をわたりて風かほる。
水は流れて掬ぶべし、米は實りて食ふべし、盛んなるかな神の德、偉いなるかなその稜威。
愚なるかな人の子よ、聽て聞えず視て見えず、水に住む魚水知らず、空に飛ぶ鳥空知らず。
神に生れて神に生き、神に動きて神に住み、神より外に出でぬ身の、神をさとらぬ愚さよ。
音樂耳にあふるとも、誰かは目にて見らるべき、山川前に開くとも、誰かは耳に聞かるべき。
神は何處にゐますぞと、問ふ人の子の愚さよ、神は爾の上にあり、神は爾の前に在り、神は爾の內にあり、神はゐまさぬ所なし。
心の眼開きなば、心の耳をすましなば、見るもの神にあらざるはなく、聞くもの神にあらざるはなし。
神は元是れ誠なり、誠の人は神の子ぞ、誠と誠と通ひなば、父なり子なり一つなり。
あゝ我は是れ神の物、我のすべてはさゝげたり、唯命これに從はん。されば雄々しき神の子の、我身なりけり信念は、牢乎不拔となりにけり、我手我足御能の、充ち籠れるを覺ゆなり。
いざいざ起ちて世のために、神の命をば傳へなん、誠の道やひろめなん。山我が前に動くべし、海我が前に開くべし。

修德の歌

なべての人ののぼりえぬ、位の山をきはむとも、必ず貴きことならず、不忠不臣の人にして、高くのぼれるためしあり。

桂の薪玉の飯、錦の衣をまとふとも、必ず崇めんことならず、品性卑き人にして、財寶に富めるものもあり。

貴ぶべきはそも何ぞ、貴きものは人の德、崇むべきはそも誰ぞ、道の人こそ崇むべきなれ。

燃ゆる心の煩惱も、御法の雨に消え果てつ、迷の雲も正覺の、いぶきの風にふきはれつ。

眞如の月のかげ清く、水や空なる空や水、舟は浮びぬ空の上、月は沈みぬ水の底。

神と我とは一つなる、時こそ何時か知らねども、柳はみどり花はあけ、天命これに從ひて、各々共に一すぢの、道をたどりて世の中に、神の心を今日といふ、今日の一日に行ふは、一日を神にすゝむなり。

神の心を人問はゞ、人の道ぞと答へなん。人の道はと又とはゞ、至誠清淨曇りなく、敬虔神に事へつゝ、篤實人に交はりて、義を見て進み恥を知り、己を愛するその如く、隣を愛し己が身の、內なる人を且つ高め、社會の爲に且つ盡し、共に御空を仰ぎつゝ、昇ることぞと答へなむ。

愛隣の歌

神に生れて神に住み、仰ぎかしこみ神の意を、この世に行ふ吾人の、覺悟は何ぞ君知るや。

禮拜頌歌讀經や、祈禱は恒の業なれど、朝な夕なに吾人の、守る敎の精神は、此世の爲めに鹽となり、光となりて、己がじし、政治、敎育、實業に、なべての事に拘らず、これを清めて改めて、且つは進めて世の中を、神の御國となすにあり。

人の心に善惡の、たえぬ戰ある如く、此世の國も善惡の、戰つねにはげしくて、邪惡は頭をもたげつゝ、正義は聲をひそめつゝ、荒きは常にはびこりて、弱きはつねに抑へらる。

さもあらばあれ、人は皆、元是れ神の赤子なり、弱きものをばいたはりて、荒ぶるものを和らげて、正しき者を勵まして、惡しき者をば悔いしめて、山も牧場も野も谷も、一つに置ける白露の、あつき惠をさとりつゝ、天に榮光地に平和、人に幸福みつる日を、はやむることこそ吾人の、胸に刻める理想なれ。殺人劍は是れ活人劍、名譽利害を外にして、正義のために愛のため、日々戰ふも此にあり。

惡戰苦鬪ありとても、などか背を顧みん、身をば殺して仁を成す、これぞ聖者の敎なる。

よしや此身は斃るとも、乃ち神にさゝぐなり、乃ち人に與ふなり、乃ち道に殉ずなり。

我精神はこゝに活く、精神活きて末たえず、清き流のつきずして、同じ心の神の子が、世々に生れて戰はゞ、神の御國の何時かなど、來らぬ事のなかるべき、是ぞ我等が愛隣と、名づけて樹つる旗章。

永生の歌

夕べを待たぬかげろふは、晝のながさを知らずかし、土より出でてしばし世に、泣きみ笑ひみまた土に、空しく歸り限りなき、生命を知らぬ人の子の、風にみだれて草の葉の、露と消えゆくかなしさよ。

玉の臺もいかでなど、つひの栖處に定むべき、財寶の山もいかにして、たゆる玉の緒つなぐべき、拔山蓋世の英雄も、茶毘一片の煙のみ、傾國傾城のたをやめも、秋の野の邊の草なれや、土風火水の分るれば、高き低きもおしなべて、夢幻の定めなく、塵となる身の哀れさよ、天地悠々人去りて、水は空しく流るめり。

さはれ我等が永遠を、思ふ心は是れ何ぞ、花をめでては實を望み、月をし見ては望を待ち、學の山を高く攀ぢ、知識の淵に深く入り、人格を練り德を修め、終には不老不死を追ひ、千古に馳する我が思、雲外に遊ぶ我が心、これぞ空しき妄想か、波にきえゆく舟みちか。

影あるものは形あり、響は音のあればなり、地にある影を追へばこそ、たゞに悶えて走るのみ、仰げよ空に日は照りて、光は笑みて我を見る。

短き人の生命こそ、永き生命の姿なれ、微かなれども道心は、不窮の道の俤ぞ。

墓は此世をぬけ出でて、假の形骸をかゞやける、榮の衣に脱ぎかへて、天津御國に入る時の、門の戸なりとさとらずや。

かくて死ぬべき人の子の、かよわき寡婦孤兒も、高き低きもろともに、再び死なぬ神の子の、榮をうけてとこしへに、道に進みて大神の、御像の如くなりぬべし。

又更に左の如き入道の四階段がある。

入道の四階段

改心の歌

日光如何に照らすとも、窓の戸とぢて開かずば、いかで惠に與らん。聖賢如何に敎ゆとも、求むる心なかりせば、空吹く風と聞きぬらん。されば我身の自覺こそ、道に進むの基なれ。

草木は榮え花は笑み、鳥は歌ひ蝶は舞ひ、萬物自得す其が中に、人のみ泣きつ悲みつ、怨みつ呟ち日を送る、何とて斯くも世は憂きぞ、人は尊き自由をば、己が嗜慾に打任せ、惡しく用ひし其が爲に、煩惱邪見執着の迷塗に墮ちし報いなれ。されば今より改心の、涙と共に立ち歸り、人の正道あゆめよや。金銀珠玉山なすも、玉の臺に住まうとも、心は痛み氣は餒ゑん。よしや驕奢を極むとも、よしや時めき榮ゆとも、電光石火と消えうする、人の命ぞはかなきや。

たとひ人をば欺くも、たとひ友には隱すとも、我と我身に責められて、苦しむ人ぞ哀れなる。

世は我がものと思ふまで、身の順境に誇るとも、狂瀾一たび起りなば、不運の嵐襲ひなば、神魂忽ち盪亂し、前後不覺ぞ愚かなる。

されば時處位にかゝはらず、脱然高く天に入り、凛然固く道を踏み、神を信じて自由を得、我等と共に樂しめよ。

虚心の歌

清き水面に月宿り、空の洞に風通ふ、如何に貴き道なるも、滿る心に入るべきや。されば敎を受くる身に、先づ告ぐべきは虚心なり。

道は何處と西東、時と處に限らるゝ、人のしめしに從ひて、彼れや此れやと分れしも、進化の德に照らされて、今ぞ目に見る全景の、一つ天地ぞ快き。

されば、我等は心して、開くる學を疎むなく、進む知識を斥けず、荒唐無稽の迷信と、無實虚構の神說を、破れる履を棄る如、惜まず棄てゝ顧みず、唯だ夫れ萬代易るなく、千古を通じて朽るなき、我が道會の四綱領、之を守りて進めよや。

誠は一つ神一つ、これぞ我等の敎なる。

愛隣の行、修德の業、是れぞ我等の勤なる、拜天の道、永生の信、是れぞ我等の生命なる。

外に向て求むる勿れ、門に沿て乞ふ勿れ、神は虚心の人に降り、道は至誠の人に動く、四時に咲き交ふ千草の花も、同じ正氣の色なれや。

得道の歌

珍味を前に列ぶとも、如何でか飢をしのぐべき、人の寶を數ふとも、如何でか己れ富ぬべき。

聖賢の敎、耳に滿ち、經典の文、目に充るとも、改心以て之を求め、虚心以て之を容れ、悟り喜び味ひて、得道自知の其人と、なるにあらずば如何にして、我魂を肥やし得ん、我魂を富し得ん。

聞けや梢の鶯も、水の蛙も諸共に、自得の聲を張り揚げて、天の惠を謳ふなり。

見よや新天新地の世、雲霧霽れて空高く、塵も日陰も消え失せて、光り輝やく其中に、神の姿ぞ拜まるゝ。

されば人々心して、改心虚心の德を積み、得道自知の人となり、新天新地に住めよかし、自得の境に謠へかし、神子の自覺に入れよかし。

傳道の歌

四海皆兄弟と思ひしに、矢丸の響、吶喊の聲、擊ち入る劍、突く槍の、下に斃るゝ幾千萬、血潮は流れ川を爲し、屍は積んで山を爲し、親は其子に、子は親に、妻は夫に、弟は兄に、別れ悲しむ慘狀は、抑も何故ぞ君知るや、宗敎の力おとろへて、てらす光のかくるれば、道ふみ迷ふ世の人の、慾にくらめる結果なれ。

幾千年の國柄も、幾億萬の國民も、哀れ果敢なき亡國の、悲境に墮ちし其源は、抑も何故ぞ君知るや、宗敎の力衰へて、人々擧りて身を思ひ、國を思はぬ結果なれ。

父は濫行、子は遊蕩、家名を汚し、身を破り、始めて覺むる本心の、光に恥ぢつ世に恥ぢつ、涙と共に悔ゆれども、碎けし玉の盃を、元に復さん術もなく、死陰に沈む老の身の、哀れをとむる其源は、抑も何故ぞ君知るや、宗教の力おとろへて、家庭みだれし結果なれ。

失意に萎れ、得意に驕り、朝に笑ひ、夕に泣き、明日をも知らぬ生命もて、盡きざる慾を追ひ求め、つひに免れぬ老病死、はかなき人の世に滿ちて、艱み苦しむ其源は、抑も何故ぞ君知るや、宗教の力衰へて、魂亡ぶ結果なれ。

されば我等は四海にも、國にも家にも個人にも、道を傳へよ傳へよや、道を傳へて諸共に、信愛望や、慈悲善業、仁義禮智や、無私無功、よろづの德を身に備へ、朽ちぬ生命の人となり、世をも國をも家も身も、潔め高めて疾く早く、神の御國を來らせよ、神の御國を來らせよ。

（此の傳道の歌は、世界大戰中に作つたものであるので、自然と其の影響を蒙つて居る。）

頌歌

まだ此の外に、色々の頌歌があるのだが、今日主として、歌うて居るのは、四綱領よりとつた、左の如きものである。

頌歌

信神頌

（今假りに讃美歌の一三七を用ふ）

愚なるかな人の子よ、聽いて聞えず視て見えず、
水に住む魚水知らず、空に飛ぶ鳥空知らず。
神に生れて神に活き、神に動きて神に住み、
神より外に出でぬ身の、神をさとらぬ愚さよ。
音樂耳にあふるとも、誰かは目にて見らるべき、
山川前に開くとも、誰かは耳に聞かるべき。
神は何處にいますぞと、問ふ人の子の愚さよ、
神は靈なり誠なり、誠と靈もて覺り得ば。
神は爾の上にあり、神は爾の前にあり、
神は爾の內にあり、神はいまさぬ所なし。
誠の眼開きなば、誠の耳をすましなば、
見るもの神にあらぬなく、聞くもの神にあらぬなし。

修德頌

（同二七三を用ふ）

なべての人ののぼりえぬ、位の山をきはむとも、

必ず貴きことならず、
高くのぼれるためしあり。
桂の薪玉の飯、
必ず崇めんことならず、
財寶に富めるものもあり。
貴ぶべきはそも何ぞ、
崇むべきはそも何ぞ、

愛隣頌

一つにおける白露の、
朝な夕なにいそしみて、
天に榮光地に平和、
はやむるこそは吾人の、
我等使命を帶ぶる身が、
正義の爲に愛のため、
惡戰苦鬪ありとても、

（同三八〇）
あつき惠をさとりつゝ、
喜び勇み仰ぎ俯し、
人に幸福みつる日を、
胸に刻める理想なれ。
名譽利害を外にして、
日々戰ふも此にあり。
などか背を顧みん、

不忠不臣の人にして、
錦の衣をまとふとも、
品性卑き人にして、
貴きものは人の德、
道の人こそ崇むべき。

身をば殺して仁を爲す、
よしや此身は斃るとも、
乃ち人に與ふなり、
我が精神はこゝに活く、
清き流のつきずして、
世々に生れて戰はゞ、
來らぬことのなかるべき、
名づけて樹つる旗章。

永生頌

夕べを待たぬかげろふは、
土より出でゝしばし世に、
空しく歸り限りなき、
風にみだれて草の葉の、
玉の臺もいかでなど、
財寶の山もいかにして、

これぞ聖者の教なる。
乃ち神にさゝぐなり、
乃ち道に殉ずなり。
精神活きて末たへず、
同じ心の神の子が、
神の御國の何時かなど、
是ぞ我等が愛隣と、

（同二五〇）
畫のながさを知らずかし、
泣きみ笑ひみまた土に、
生命を知らぬ人の子の、
露と消え行くかなしさよ。
つひの栖處と定むべき、
たゆる玉の緒つなぐべき、

拔山蓋世の英雄も、　　茶毘一片の煙のみ、
されど我友神の子は、　　とこしへかけて亡びなし。

倘右の外に彼の『事天の一途』の如き、『道會バイブル』『道會四書』道會老莊列』『道會詩集』『道會語錄』等もあるが、皆道會の經典たるべきものである。

道會目下の情況

(一)生ける宗教

此道會と云ふ宗教團體を起した當時、耶蘇教界の識者は謂つた、『古より左樣云ふ主義主張の下に宗教を說いたものや、其の團體を起したものは尠くない。然し大抵皆、物にならなかつた。理窟は尤である。然し其れが實際に生命ある宗教となり、狂熱的信仰となり、而してそれで人の神魂迄をも動かすものとなるか怎か、單に抽象的な知識的な主義主張は卽ち單に一の學說となつて了らしまいか。由來、宗教は生るべきものであつて、作らるべきものではない。そんなに、宗教は耶蘇教より取り、道德は儒教より取り、修練は禪より取ると云ふ樣に、方々から、頭や手や足を取つて來て、それで、生きた人間となるか怎か、彼れユニテリアンの如く、現に今日英米に在る、レショナル、チャーチや、

エシカル、チャーチの如く、詰り生ける靈的宗教にはなるまい。況んや、松村の樣な、學もなく、智もなく、德もない人間が出て來て、开な宗教を作らんとしたところで、それが物になる筈がない』と。

然し、予輩は考へた。成程、予輩には智も學も德もない、然し此の主義主張は、理窟ばかりではない、智的ばかりではない、又わざと作つたものでもない、之れは本當に予輩が心から信じ、而して之を予輩が身に行ひ、其れが已に本當に予輩の生命となつてゐるのであるから、此の予輩の裏に生きて居る信仰を、人に傳へる事の出來ない筈はない、否、必ず出來る、況んや神が之を命じ給ふに於ておやと、而して之を確信して疑はなかつた。左れば、今日になつては如何。我が道會で、最も盛んなるものは祈禱會である。我が道會では自力を主張し、修養を主張し、事上の練磨を主張す、然し一方には、神を信じ、此の神の中に生き、此の神の中に動き、此の神の中に包容せられて居るものであると信じて居るが故に、怎しても、此の神に向うて、感謝、祈禱せざるを得ないのである。況んや、此の主義主張を引提げて、世に活動するに當りては、怎しても、我に德の足らず、智慧の足らず、學の足らざるを痛感せざるを得ないが故に、理窟ではなく、實際に神に縋がらざるを得ないのである。左れば來りて見よである、如何に我が同心同志の者が、熱烈に神に祈り、神の靈を受け、而して如何に獻身犧牲の精神を以て、我が傳道界に活躍して居るかを。卽ち論より證據、我が此の生命的活躍を見よと謂ふより外はないのである。

(二) 修　　德

次には修德、之は、前にも云ふ通り、大學の最初にある一句を標準として居るのである。卽ち其の句は、

『古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を修む。其の身を修めんと欲する者は、先づ其の心を正しうす。其の心を正しうせんと欲する者は、先づ其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すは物に格るに在り』と云ふのである。

此の物と云ふのは神である。先づ神を知り、神に事へる、さうすれば、意が誠になり、意が誠になれば、心が正しくなり、心が正しくなれば、身が修まり、身が修まれば、家が齊ひ、家が齊へば、國が治まり、國が治まれば、天下が平かになると云ふのである。我が道會員は、我が道會の主義主張を天下に傳へ、天下の人をして、神を父とし、人類を兄弟として相交はらしむる、これが大眼目である。然し天下を平かにするには、先づ我が國家を治めて行かねばならぬ、我が國家を治めて行くには先づ我が家を齊へて行かねばならぬ、我が家を齊へて行くには、先づ我が身を修めて行かねばならぬ、而して我が身を修むるには、先づ正心誠意、格物致知より出發せねばならぬ。左れば、此れ亦た、來りて見よである。我が同心同志の者は皆、先づ神に格り、次に意を誠にし、心を正しうし、身を修め、其の家を齊へ、遂に國を治め、天下を平かにする大業に參加して居ると云ふ自覺のある者ばかりである。かの無暗に諸方へ說法して廻つて居るが、其の間、名利に驅れたり、卑劣な行動をしたり、動物慾に支配せられる樣なものは一人も居ない。否、例へ、色々な誘惑に逢ふ事あるとも、たとひ一時それに負ける事があつても、直ぐに克己復禮以て、益々精神修養に努力し以て向上して行くものばかりである。卽ち先づ身自から本當の人間となつて、遂に天下國家に及ぼさんとしてゐるものばかりである。而して之れも亦た、來りて見よである。

(三) 愛　　隣

之れは我が道會の活動舞臺である。從來の宗敎の多くは、御利益主義である。家內安全、息災延命、商賣繁昌と云うて、僅少の御賽錢を投げて、莫大な利益に預り度いと念ずる者のみである。尤も其れも矢張り宗敎である。然し低級な宗敎である。我が道會はそんな宗敎ではない。尤も色々な事を神に祈る、然しそれは己れの本分を盡した上、尙且つ、神の力と神の恩寵を祈るのである。又從來の宗敎は、大低後生を念じ、天國に救はるゝ事を主眼としたものである。尤も我が道會も亦た未來の世界を望み、金の冠、我が前に供へありと信ずるものである。然し、それが必ずしも目的ではない。

我等が此の世に出でたる使命は、此の世に於て神に事へ、神の命を奉じて、此の世の人を救ひ、此の世の社會を救ひ、此の世の國家を救ひ、此の世の天下を救ふが爲めである。故に我が道會は他の宗教とは違ひ、一方には、信神、修德を說くと共に、天下を論じ、國家を論じ、社會を論じ、政治を論じ、教育を論じ、軍事を論じ、實業を論じ、外交を論じ、凡そ人事百般を論じ、獻身犧牲の覺悟で、此の世に活躍せねばならぬのである。卽ち一言で言ふと、天國を此の世に打建てる覺悟で、勇往するものである、而して、其れが卽ち愛隣の行動なのである。

(四) 永生

此れは人間の終局如何を說くのである。如何なる英雄豪傑も、聖人君子も、終には皆死屍となり、土となり、煙となるに決まつて居る、而して此の點から觀ると、人間は果敢ないもの、憫なもの、しばらく此の世に出て來て、直ぐに消ゆる露の如きものである。朝生れて晝に死する蜉蝣の如きものである。左れば國家も天下も、畢竟は此の露の人間の國家、蜉蝣の人間の天下となつて、一方から觀ると可笑なものである。然し我等は永生を信ずるものである。而して此の永生を眞に確信し來る時には天地を小とし、日月を短となし、乾坤を呑吐し、八紘を抱括する大魂者となる事が出來るのである、而して於此乎初めて我こそ神の子であると自覺する事が出來るのである。故に我等は此の永生を以て最も重大なる信條となし、此處に大見識を具へ、此處に大人格を練り上げ、此處に人生無限の價値を見出すのである。

結尾

先づ大略は右の如きものである、只此の上は、來りて見よ、右が果して事實であるか、將、大言壯語であるか、知識の上ばかりであるか、理窟ばかりであるか、將た其れが本當に會員の生命となつて居るか、怎か、來りて見よ、之れが卽ち結尾である。

（終）

昭和九年一月五日印刷
昭和九年一月十日發行

日本宗教講座
第二回配本

發行所　東京市麻布区霞町一〇八
東方書院
代表者　三井嘉史

印刷所　東京市小石川区久堅町一〇八
共同印刷株式會社
代表者　谷口雄

製本所　東京市神田区一ツ橋通町二
東方書院

不許複製

終